

雨ニモマケズ

外交評論家

岡本行夫



2011年10月、岩手県大船渡市で撮影。震災後、漁師たちはすぐに海に戻っていった

雨ニモマケズ 風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈夫ナカラダヲモチ：

宮沢賢治は岩手県花巻市の出身。生まれたのは明治三陸地震津波の1896年。それから百有余年たつて、再び東北を襲った大津波。

その3月11日から、僕は居ても立ってもいらなくなるなり、三陸沿岸部を何度も訪ねた。まずは漁業復興の手伝いをと思い、東京で企業を訪ね歩き、まとまった資金を得て、それから海運会社に冷凍コンテナ百数十本を援助してもらい、応急の冷蔵・冷凍庫として被災地に送ることにした。そのほかにフォークリフト、車輛、事務用機器など。賛同する仲間たちと「希望の烽火基金」を立ち上げ、岩手と宮城で15の漁港に設置してまわった。

漁期を逸すれば、一年間、魚を水揚げできない。僕たちはとにかく作業を急いだ。そして、最初の冷凍コンテナが待ちかねていた東北の漁港に送り込まれたのは、震災3カ月後だった。

現地で最も大きな協力をしてくれたのが、JICAのM氏だった。僕は彼のおかげで、被災地のまことに的確な状況と、あるべき援助の姿を

知ることができた（僕が官邸でイラク復興を担当していた時も、イラクで獅子奮迅の働きをしていた彼に助けてもらった）。

しかしM氏顕彰は本稿の目的ではない。言いたいのは、僕が東北でのM氏の動きにJICAの深みと使命感を見たことである。JICAは、バリバリの現役のM氏をJICA本来の活動である国際協力から引き剥がして東北支援に張り付けた。災害復旧の枠組みと手法は、海外であれ国内であれ、基本的に同じだ。

東ニ病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ行ッテソノ稲ノ東ヲ負イ

国際協力の現場の手法を震災救済に活用したM氏は、復興に新しい風を吹き込んだ。世界屈指の援助能力を持つJICAの東北への関与。元青年海外協力隊員たちが東北で立ち働くさま。新鮮な驚きだった。

M氏は言った。「日本ではめったに起こらない非ルーティンなことは、海外ではよく起きます。援助関係者には、そうした経験が無形財産として蓄積されているのです」。

肝心の東北復興のペースは決して早くない。遅れの原因の大半はやむを得ざるものだが、初期の段階にもう少し荒っぽいやり方をすれば、別の結果が生まれていたかもしれない。とにかく最重要なのはスピードだ。

JICAは、前政権のもとで「事業仕分け」の名のもとにバッシングにあった。ファッショナブルな服を見事に着こなした議員先生などに散々やっつけられ、事業を削減され、職員の待遇まで劣化させられた。公務員の最下位に位置付けない限り許さないという議論であった。

私は民主党時代の一昨年2月、衆議院予算委員会の公聴会でこう陳述した。

「今もなお、世界各地では1万人のJICA関係者と青年海外協力隊の若者たちが、国の名譽をかけ、献身的に援助活動に携わっております」「本来、我々はこの人たちに最大の敬意と感謝を払うべきなのに、JICAは事業仕分けの対象とされ、なぜ国家公務員並の宿舍が必要なのか、ウィークリーマンションでもいいじゃないか、なぜ外交官の8割もの手当が必要なのかなどと仕分け人に居丈高に宣告されて、予算が削減される。その結果、危険な任地に勤務するJICA職員も、疲弊しながらエコノミーで日本と往復することになりました。我々はこれで溜飲を下げるのでしょうか」

宮沢賢治は「ホメラレモセス、ク（苦）ニモサ



「希望の烽火基金」を通じて送られた冷凍コンテナと地元の漁師たち



岩手県久慈市役所の職員に被災状況をヒアリングする筆者（右から3人目）

レス。サウイフモノニワタシハナリタイ」と書いたが、「誇りモステ」とは書かなかった。議員席からの野次を覚悟したが、代わりに来たのは拍手だった。少くない人々が仕分け人への違和感を持っていないに違いない。

日本中に「絆」や「連帯」や「がんばろう東北」の言葉があふれた。

多くの善意の人々がいた一方、我々の狭隘さもむき出しになった。がれきの広域処理への反対は各地で起こった。ボランティアの数も減った。福島の子どもたちが移転先の県で保育園から閉め出されたりした。三陸の魚は安全なのに、スーパーや消費者たちの事実上の不買運動に遭ったりした。

ヒドリ（日照り）ノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツ（冷害）ハオロオロアルキ：

抗えない自然の災害は常にやってくる。複雑な行政の仕組みと人間模様が、時として復興作業を妨げる。被災者にはなんの責任もない。東北の人々は忍耐がよく、じつと支援を待っている。

慾ハナク、決シテ瞋（怒）ラズ、イツモシヅカニ
ワラツテイル：

じきに、東北に三度目の冬がやってくる。
（宮沢賢治の詩の中のカッコ書きは筆者注）

<Profile>

おかもと・ゆきお

1945年、神奈川県出身。68年一橋大学経済学部卒、外務省入省。91年退官。同年、株式会社岡本アソシエイツ設立、代表取締役就任。橋本内閣で96～98年総理大臣補佐官（沖縄担当）。2001年9月より内閣官房参与。03年4月より04年3月まで総理大臣補佐官（イラク問題担当）。国際問題の専門家として、政府関係機関や企業への助言活動の傍ら、講演や新聞、雑誌への執筆など幅広く活動中。